

## 終助詞における情報帰属の構造と動的機能

川 岸 克 己

The Structure and Dynamic Function of Information Attribution in Sentence-Final Particles

Katsumi KAWAGISHI

### 要 旨

なわ張り理論においては、終助詞「ね」のみがその基本的な概念に関与している。しかし、終助詞は相互に意味的な構造を構築しており、ただ「ね」のみが関与するというのは考えにくい。そこで、なわ張り理論の本質である情報の所有権を情報の帰属と捉え直し、情報の帰属と終助詞全体の構造の関係を再構築した。その結果、話し手と聞き手の間の情報の帰属状況によって、終助詞「よ」「ね」「か」、そして「かね」が整合的な構造を構築することが分かった。

キーワード：終助詞、自己拡張機能、情報帰属、自己と非自己、なわ張り理論

### 1. 背 景

#### 終助詞「ね」の自己拡張機能

以前、川岸克己(2019)「終助詞『ね』の動的機能」(『安田女子大学大学院紀要』)で、終助詞「ね」の自己拡張機能について論じた。論旨はこうである。なぜ終助詞「ね」は話し手の情報を話し手と同じく既知の情報として有している聞き手に向かって確認するのか、を問題として提起し、この、少々奇妙な意味を有する終助詞「ね」の機能は、話し手が自己の既知情報を聞き手に提示し、それに対して聞き手が同意する、すなわち同じ情報を共有することによって、聞き手のなかに擬似的な話し手の自己領域を形成させ、話し手の自己拡張を企図するものであると結論づけた。その際、終助詞「ね」の意図するところを「自己拡張機能」と定義した。

#### 情報のなわ張り理論

なぜ終助詞「ね」に着目したかについては、神尾昭雄『情報のなわ張り理論』の基本概念にあった。神尾1990では、情報は「話し手または聞き手と文の表わす情報との間に一次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は<近>および<遠>の2つの目盛によって測定される。」(神尾1990, p21)と定義し、これを以下のように図示した。

話し手は、話し手と聞き手の間においてやりとりする情報が、自分(話し手)の情報なのか相手(聞き手)の情報なのかで分節している。これは、行動生物学的な視点に立った理論であり、言語の存在の、いわばより根本的な本質を見極めようとする理論である。

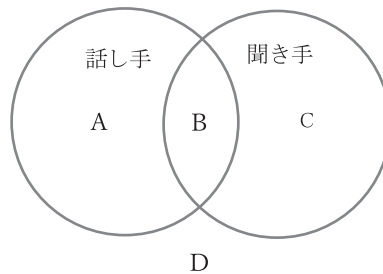
図表1

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の なわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接ね形	C 間接ね形

(神尾1990, p.32)

ただし、相互の関係が少々分かりにくいので、なわ張り理論の趣旨を踏まえ弁図あるいはマトリックス図に変換してみると、2種4項目の関係が分かりやすくなるだろう。ここでは試みに弁図を提示してみる。

図表2



## 2. 問 題

### なわ張り理論における終助詞「ね」

上記の図表1および図表2に示されるように、神尾の理論において情報のなわ張りは大きく4つの分節されるわけであるが、終助詞「ね」のみが特異的な存在として扱われているのが特徴的である。いうまでもなく終助詞は「ね」のみではない。しかし、他の終助詞は、情報のなわ張り理論のなかではとりたてて論じられることはなく、「ね」のように基本概念に関与するとされることもない。そこに違和感を覚える。

終助詞は、「ね」以外にも、「よ」や「か」などがある。地理的社会的位相による終助詞を加えればさらに増える。にもかかわらず、「ね」のみが根幹的な理論に関与するのは理解として整合的ではない。整合的ではないということは、さらに考察を必要とする余地がそこに存在するのではないか。

情報のなわ張り理論は、終助詞のみならず、断定形式や推量形式など、さまざまな表現形式を総合して、情報のなわ張りについて論じている。情報のなわ張りそのものの考え方には同意するが、終助詞の把握にはさらなる検討の余地があるように思われる。

### 終助詞によるなわ張り理論

そこで、情報の所有権の所在を重要な視点とする「情報のなわ張り理論」において、終助詞「ね」が重要な役割を担うとすれば、終助詞「ね」と同様、話し手と聞き手の関係を構築する役割を担う他の終助詞は、情報のなわ張りといった視点から、どのような役割を果たしているの

か。さらには、終助詞全体を情報のなわ張りのなかに、終助詞「ね」だけではなしに再構築することは可能か、可能であればどのような体系が構築されうるのか。こうしたことを本論の問題として提起する。

### 3. 仮 説

#### 術語の整理

神尾1990の理論を特徴づける「なわ張り」は、「情報の所有権」を示す独自の術語である。「なわ張り」も「所有権」も、概念をイメージしやすく、かつ理解しやすい術語ではあるが、言語の本質を把握するにあたっての比喩的な表現でもある。話し手が自分のなわ張りのなかにある情報として想定するのは、その情報をすでに知っている場合や、その情報が自らに關係する場合などである。よってそうしたことを踏まえ、ここでは、自らが既に知っていること、自らに關係すると話し手が判断することを、「帰属」と定義し記述する。逆に、話し手が自らが知らないこと、自らに關係しないと話し手が判断することを、「不帰属」と定義し記述する。

#### 終助詞「ね」以外の終助詞

さて、終助詞「ね」以外にはどんな形式の終助詞があるのか。具体的にあげるとすれば、一般的なものとして「よ」と「か」がある。

- 01) 明日、晴れるよ。
- 02) 明日、晴れるね。
- 03) 明日、晴れるか。

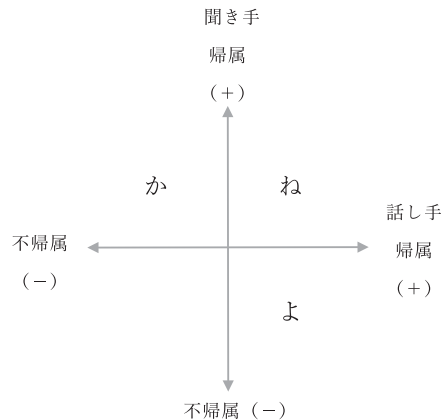
これら3つの終助詞によって示される情報（ここでは「明日、晴れる」）を、話し手はどのように扱っているか。終助詞「よ」は、話し手によって自らの情報として発信される情報（帰属）を、聞き手が自らには帰属しない情報（不帰属）として受信すると話し手が判断する場合に用いられる。いわば「教示」とでもいうべき終助詞である。終助詞「ね」は、話し手が自らに帰属する情報として発信する情報を、聞き手も自らに帰属する情報として受信するだろうと話し手が判断する場合に用いられる。これを一般的には「確認」としている。終助詞「か」は、「疑問」の終助詞とされているが、これは、話し手にとって、自らに帰属しない情報として発信するが、聞き手には帰属する情報であろうと話し手が判断して発信する場合に用いられる。

これらを、なわ張り理論の概念図に当てはめ、本論で用いる術語に置き換えて整理すると、以下のようになる。

図表 3

情報の所在		話し手	
		帰属	不帰属
聞き手	不帰属	よ	
	帰属	ね	か

しかし、これでは終助詞どうしの属性関係が少々分かりにくいので、話し手と聞き手、それぞれを軸にとってマトリックスで図示すると以下ようになる。



図表 4

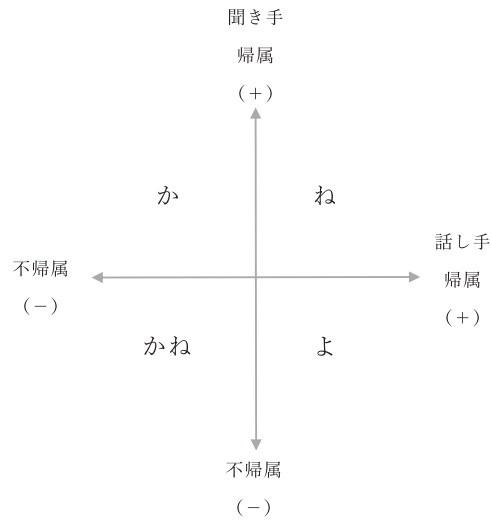
終助詞「ね」は、話し手と聞き手両方に帰属する情報である。それに対して、終助詞「よ」と「か」は、話し手と聞き手の情報の帰属のあり方が反対あるいは対照的な関係にある。ここで自然と目が行くのが、話し手と聞き手に帰属しない情報（不帰属）である左下の象限である。話し手にも聞き手にも帰属しない情報を表現する終助詞がここに位置することになる。いったいどんな表現なのだろう。たとえば、以下の表現である。

- 04) A) 明日、晴れるかね。  
B) さあ、どうでしょう。

話し手は、扱う情報（「明日、晴れる」）に対して、まだ判断できない。つまり、話し手には帰属しない情報である。話し手は、その判断を求めて、聞き手に問いかける。しかし、その場合は、「明日、晴れるか」でもいい。にもかかわらず、「明日、晴れるか」ではなく、「明日、晴れるかね」と発信する場合、聞き手も確たる判断ができないと、話し手が考えている場合であろう。たとえば、微妙な差ではあるが、「か」の場合は、聞き手が明日の天気に関して何らかの情報を得ていると判断できるときであれば、「か」を用いるだろう。一方、「かね」の場合は、例えば、明日晴れることを期待しているが、目の前の雲行き、あるいは気象情報から判断すると、どうやらそれは望めない。明日晴れてほしいけれど、晴れるとは思えない、という、話し手に帰属しない「明日、晴れる」という情報を、さすがに聞き手も晴れるとは思っていないだろうと聞き手が判断するような場合に用いられる。「かね」は、話し手と聞き手の両方にとって、自らに帰属することは容認できない情報を共有することを表している。

#### 情報帰属仮説

上記の予備的な考察によれば、情報のなわ張りは、終助詞のみによっても同様に構造化される。



図表 5

話し手と聞き手に帰属しない情報となる左下の象限は、終助詞「か」と「ね」の相互承接形式が担う。話し手と聞き手に帰属しない情報であれば、情報のやり取りは不可能であるかのように思える。しかし、「かね」は、話し手に帰属しない情報を、聞き手にも帰属しない情報としてやり取りすることではなく、話し手に帰属しない情報を、聞き手にも不帰属であると「共有」することである。これによって、終助詞「かね」は、「ね」とちょうど対照的かつ整合的な構造を築くことができる。よって、この構造をもって、終助詞のみによる情報のやり取りを表現する構造であるとする。

これを表に整理し直してみると、以下のようになるだろう。

図表 6

	終助詞	情報		意味	構造
		話し手	聞き手		
A	よ	帰属	不帰属	教示	帰属情報の提示
B	ね	帰属	帰属	確認	帰属情報の共有
C	か	不帰属	帰属	質問	不帰属情報の提示
D	かね	不帰属	不帰属	疑念	不帰属情報の共有

#### 4. 論 証

仮説の妥当性を論証するには、終助詞「かね」の意味を検証することが第一にあげられるが、その前に、そのほかの終助詞「よ」「ね」「か」についても、情報帰属の視点から検証し直すべきであろう。これらの終助詞が、情報の帰属・不帰属の構造において、矛盾点や不整合を生起しなければ、「かね」の論証に論を進めることができるだろう。

## 終助詞「よ」「ね」「か」の検証

終助詞「よ」は、話し手に帰属する情報を、話し手が聞き手には帰属しないと判断する場合に用いられる終助詞である。

- 05) この夕焼け空なら、明日は、きっと晴れるよ。  
 06) 君のアイディアはほんとうに素晴らしいよ。  
 07) この問題の答え、やっと分かったよ。

05) の用例、明日晴れるかどうかについて、話し手は目の前の夕焼けを見て、晴れると確信していることが分かる。話し手に帰属する情報である。そして、「よ」が使われる場合は、その情報は、聞き手には帰属しない、あるいは話し手は聞き手に帰属させない。話し手が今日の前の美しい夕焼けを前にして確信したのであれば、たとえ聞き手も晴れを予想していても、その情報は話し手だけに帰属する情報であると話し手は判断した。それを表現したものである。もし聞き手も話し手と一緒に夕焼けを前にしたら晴れだと確信するだろうが、だからといって話し手が聞き手と情報を共有するとは限らない。そこは話し手の判断、表現なのである。

06) の用例、君は気づいていないかもしれないけれど、このアイディアは素晴らしい、それが私には分かるのだ、というような場合に用いられる。聞き手も自信があるからこのアイディアを提案してきたのだらうと考えられるが、そこは考慮されない。だから、聞き手の反応としては、不意に評価されて感激する場合もあるだろうし、してやったりといった表情で自信を深める場合もあるだろう。いずれにしても、話し手は、この情報を自らが独占し、この情報を聞き手には帰属させないといった表現である。

07) の用例、やっと分かったという情報は、話し手個人のものであり、それを話し手は聞き手に提示している。つまり、話し手に帰属する情報を、聞き手にはまだ帰属していない情報として、話し手が聞き手に提示しているのである。

したがって、終助詞「よ」は、情報帰属の概念図のとおり、話し手に帰属する情報を、話し手が聞き手には帰属しない情報として提示する用法であるということが出来る。

終助詞「ね」は、話し手に帰属する情報を、話し手が聞き手にも帰属すると判断する場合に用いられる終助詞である。

- 08) この星空なら、明日もきっと晴れるね。  
 09) 彼は子どもの頃から優秀だったんだらうね。  
 10) おめでとう、やったね。

08) の用例、話し手は聞き手といっしょに満天の星空を見上げながら、「明日もきっと晴れる」と確信し、それを隣にいる聞き手に話している。晴れるという情報をまずは自らに帰属する情報とし、同時に聞き手にも帰属する情報として話し手は扱い、共有している。終助詞「ね」の典型的な用法である。

09) の用例、話し手は、彼の今現在の成功に際し、これは一朝一夕になるものではないと感じた。きっと子どもの頃から優秀だったんだらうと推測する。話し手は「子どもの頃から優秀だっ

た」だろうと判断し、自らに帰属する情報とし、彼を子どもの頃から知る聞き手に、自らの情報を提示する。聞き手は当然彼を子どもの頃から知っているし、現在の成功も知っているのだから、話し手は話し手と同様、「彼は子どもの頃から優秀だった」という情報を帰属させることができるかと判断した。こうした状況を踏まえて使用されるのが、この場合の「ね」である。

10) の用例、「やった」(物事がうまくいった)。そのことをいちばん良く知っているのは、聞き手であろう。そして、そのうまくいったという情報を、話し手は「おめでとう」の賛辞とともに、自らも共有する。話し手聞き手とも、この情報を自らの帰属させようものとして話し手が判断し使用された終助詞である。

したがって、終助詞「ね」は、話し手に帰属する情報を、話し手が聞き手にも帰属すると判断する場合に用いられる終助詞として理解することができる。

終助詞「か」は、話し手に帰属しない情報を、話し手が聞き手には帰属すると判断する場合に用いられる終助詞である。

- 11) もう1週間も雨が続けているけれど、明日は晴れるのか。
- 12) 犬は人間の言葉が分かるのか。
- 13) こんな仕事、もうやってられるか。

11) の用例、こんなに雨が続きと明日もまた晴れそうにない、つまり「明日は晴れる」という情報は話し手にとって受け入れがたいので、自らにこの情報を帰属せず、その情報の如何を聞き手に尋ねる。例えば天気予報のサイトを熱心に見ている友人にそう尋ねる場合などが想定される。

12) の用例、人間の言葉が分かるという情報を話し手は自分には判断できないと認識している。

つまり、自らに帰属しない情報である。それを話し手が聞き手に尋ねる場合、聞き手は知っている、つまり聞き手にその情報が帰属していると話し手は考えている。よって、情報は話し手に帰属せず、聞き手に帰属している。ちなみに、この用例は「か」が「でしょう」に下接している。情報のなわ張り理論でいえば、間接形に分類されるものである。しかし、終助詞によってなわ張りを考える場合は、直接系であるか間接形であるか関係することはない。

13) の用例、これは話し手から聞き手に対する質問とはいえない。こんな仕事、もうやってられない、という情報を終助詞「か」によって言い放っている。話し手は「こんな仕事、もうやってられる」、つまり、この仕事を続けていける、という情報を受け入れられないわけで、自分に帰属しない情報である。これを聞き手に投げつける用法と言えるが、この場合、聞き手の存在は明確ではないものの、聞き手はどう思うんだという意味で聞き手の反応(聞き手に帰属する情報)を引き出そうとしているとみることもできる。あるいは、実際に回答を期待してはいないが、そうした形式をとることによって、話し手の、情報に対する強い否定的な想い、すなわち不帰属情報であることを示していると考えられることもできる。

したがって、終助詞「か」は、話し手に帰属しない情報を、話し手が聞き手に帰属するであろうと判断して提示する用法であることが確認できるであろう。

## 終助詞の相互承接形式「かね」

終助詞「かね」は、先の仮説の図表5および6において示されているように、話し手に帰属せず、聞き手も帰属しない用法である。話し手にも聞き手にも情報が帰属しないというのは、奇異な状況のように思える。しかし、両者が情報の帰属を認めない状況において、その状況を共有する、というのがこの用法である。

- 14) 明日、晴れるかね。  
 15) 今日のコンサート、みんな楽しんでくれるかね。  
 16) やあ、みなさん、元気にしていたかね。  
 17) 君たちはなんと言ったら分かるのかね。

14) の用例、たとえば、明日は晴れるとされているけれど、今日のこの土砂降りの様子を見ると、とうてい明日晴れるとは思えないようなとき、話し手は、明日晴れるという情報を自らに帰属させることはできない。同じく話し手の横で土砂降りの雨空を見ている友人も、きっと晴れるとは思っていないだろうと話し手は判断する。つまり、お互い晴れないと思っている状況で、話し手が聞き手に発する表現が「かね」といえるだろう。すなわち、晴れるはずがないという意味である。つまり、話し手と聞き手がともに自分に帰属しない情報を共有している。

15) の用例、今日の自分たち主催のコンサートをみんなが楽しんでくれるかどうか不安でしかたがない、つまり話し手自身に帰属しない情報である。それに対して、聞き手も楽しんでくれるかどうか分からないだろうという自信のない話し手の気持ちが、聞き手にも「楽しんでくれる」という情報を帰属させない。その状況を作り出すことによって、強い不安を表現している。

16) の用例、話し手は聞き手に対して目上の存在であること感じられる。みなさんが元気にしていたかどうか、話し手である自分は詳しくは知らない。しかし、それは、私の立場からしたら仕方のないことだ。元気にしていたか、すなわち、元気だったかという情報を話し手は自らに帰属しない情報として理解するが、聞き手も話し手同様、みなさんが元気だったかを知らないことをうけいれてくれるだろう、話し手に不帰属な情報を聞き手も不帰属な情報として容認するだろうという意識が働いている。

17) の用例、何度言ったら分かるのかは、話し手は何度言っても分からないんだなと思っているわけで、「言ったら分かる」という情報については、自らに不帰属な情報として理解している。そして、叱責されている聞き手は、それが分からないから、つまり自らに帰属する情報となり得ないから叱責されているわけで、そういった点において、この情報が話し手にも聞き手にも不帰属であることを双方が共有するという意味が表現されている。

したがって、終助詞「かね」は、話し手にとっても聞き手にとっても、不帰属な情報であることを表現するが、両者にとって不帰属な情報であることを共有することが、この表現の意図するところであった。

## 結 論

## 仮説の可否

ここまで、仮説の論証として、終助詞「よ」「ね」「か」を情報の帰属という視点から検証し、



さらに終助詞「かね」が話し手にとっても聞き手にとっても、不帰属な情報を表現する複合的な終助詞であることを論証した。これによって、仮説の概念図は論証され、仮説の妥当性を追認することができた。

### 理論への展開

終助詞の体系にも、なわ張り理論と同様の体系があることがわかった。本論はそこを論証することを目的とした。しかし、終助詞を情報帰属の視点から再構築する研究の射程はそこに留まらない。

終助詞「よ」「ね」「か」「かね」、いずれも話し手が自らの情報を聞き手に提示または共有する「自己拡張」行為である。その手法は、帰属あるいは不帰属の情報であるか、それを提示するのか共有するのか、それぞれ異なるが、話し手自らの情報を聞き手に及ぼすという点においては同一の機能である。我々言語主体は、話し手自身に帰属する情報を、話し手自身に帰属しない情報に連結させ、未知の新しい情報を順次自らの情報、すなわち自らを形成する既知の情報に変換させていくことによって、自らの領域を拡大させていく。それが、生命である我々言語主体にとって、生きるということになるだろう。それを遂行するために、言語は、あらゆる情報を自己の情報（自らに帰属する情報）と非自己の情報（自らに帰属しない情報）とに分け、自己と非自己がお互い反発、排他的な関係になるのではなく、自己が非自己を吸収し、非自己が自己を拡大化させていく、その螺旋的な循環が言語の本質である。こうした考察に、本論の終助詞の情報帰属仮説は寄与していくことだろう。さらにいうなら、こうした終助詞の動的機能こそが言語がもつ本質的な意味であり、こうした視点から演繹的にさまざまな言語現象を分析していくことがこれから求められると考えている。

### 課 題

ここで取り上げた終助詞「よ」「ね」「か」「かね」だけではなく、終助詞にはさらに多くの表現形式が存在する。例えば、以下に挙げるような終助詞である。

- 18) 明日は、晴れるさ。
- 19) 明日は、晴れるぞ。
- 20) 明日は、晴れるぜ。
- 21) 明日は、晴れるよね。
- 22) 明日は、晴れるかよ。
- 23) 明日は、晴れるかい。

などである。これらを、ここまで論じてきた終助詞と一緒に図表にまとめてみると、以下のようになるだろう。

図表7

終助詞	情報		意味	構造
	話し手	聞き手		
よ	帰属	不帰属	教示	帰属情報の提示 (弱)
さ	帰属	不帰属	教示	帰属情報の提示 (強)
ぞ	帰属	不帰属	教示	帰属情報の提示 (強)
ぜ	帰属	不帰属	教示	帰属情報の提示 (強)
ね	帰属	帰属	確認	帰属情報の共有 (弱)
よね	帰属	帰属	確認	帰属情報の共有 (強)
か	不帰属	帰属	質問	不帰属情報の提示 (強)
かい	不帰属	帰属	質問	不帰属情報の提示 (弱)
かよ	不帰属	不帰属	詰問	不帰属情報の提示 (強)
かね	不帰属	不帰属	疑念	不帰属情報の共有 (弱)
かねえ	不帰属	不帰属	疑念	不帰属情報の共有 (弱)

これらの終助詞の多様性には、イントネーションが深くかかわってくる。話し手と聞き手とのデリケートなニュアンスが感じられる表現である。これらの意図するところは、さきに仮説であげた構造に強弱をつける役割を担っているように思える。話し手から聞き手への情報の提示、あるいは共有という行為によって、話し手は自己拡張を試みようとしている。この自己拡張を成功させるためには、聞き手にそれが効果的に作用しなければならない。そのために、提示や共有に強弱、実際は弱側にバリエーションが存在するようであるが、強弱をつけることによって、自己拡張の実現の可能性の向上を企図していると思われる。そうした表現もあわせて考察していくことが次の課題である。

#### 引用および参考文献

- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館書店, 1990年5月
- 神尾昭雄 (2002) 『統・情報のなわ張り理論』大修館書店, 2002年9月
- 伊豆原英子 (2003) 「終助詞『よ』『よね』『ね』再考」『愛知学院大学教養部紀要』第51巻第2号, 愛知学院大学, 2003年12月
- 川岸克己 (2019) 「終助詞「ね」の動的機能」『安田女子大学大学院紀要』2019年3月